

豊旗雲の正体*

伊藤 亀雄**

綿津海の豊旗雲に入日さし

今宵の月夜 清明己曾

天智天皇 (626—671)

万葉集の巻頭にあるこの歌の第5句は、きよくてりこそ、きよらけくこそ、さやにてりこそ、まさやかにこそ、など読み方に諸説がある。しかし、それはともかく、この豊旗雲とはいったいどんな雲だったのであろうか。正確にはまだ誰にもわかっていないようである。

藤原先生は、その著「雲」の巻頭にこの歌を掲げて、次のように述べておられる。

“これは「晴しらす」又は「雷しらす」の白く長く長旋の翻るに似た雲が、夕日に映えて美しいのか詠まれたものに相違なく、そのために「今宵の月夜清く明りこそ」と予報を遊ばされたものと拝しうるのであります。この「晴しらす」の知識は、今まで殆んど知られておりませんで、本書にある解などが、恐らくこれに関する最初のものと思われまふ。それが既に天智天皇は御承知あらせられたことで、それを千有余年を経て、昭和の今日漸くは気がついた次第であります”

ここに先生が「雷しらす」といわれたのは、絹雲の一種で、積乱雲の頭部から吹き出した曲線状の雲である。また「晴しらす」は“分離して天の一部分にのみ現われる屈曲性の強い絹雲とされている雲である。この説明で、豊旗雲については、今日まで誰も疑議をさしはさむものはなかった。

処が、最近私は計らずも中公新書の「万葉百歌」に、豊旗雲について「文徳実録」から次の一節が引用してあ

るのを見て驚いた。

“六月庚子早旦、白雲有り。艮（北東）より坤（南西）に亘る。時人これを旗雲と謂う。”

今日では、旗といえは日の丸のようなものを連想する人が多いが、本来の旗はそういうものではなく、細長い吹き流しまたは帯のような形のものである。

また豊旗雲の豊は、大きく美しいという意味の修飾語にすぎないから、この場合は旗雲すなわち豊旗雲とみて差支えない。

このような旗状または帯状の絹雲、すなわち Band cirrus は、古くから雨の前兆として、諺や言い伝えなどで広く知られているものである。

もちろん、藤原先生もそれはよく御存知であったからこそ、天皇の後歌に出てくる豊旗雲が、まさかこの帯状絹雲であろうとは、気がつかれなかったものと思われる。

私は戦時中から、帯状絹雲に特別の興味を持ち、これを観察している内に、次のような面白い事実気がついて、数回に亘って雑誌などに発表したことがある。それは、

“ひと口に帯状絹雲といっても、実はそれに二つの種類がある。帯が南東から北西に亘っているものは雨の前兆であるが、北東から南西に亘るものは雨は降らずに却って良い天気が続く。つまり、見かけの形が全く同じ帯状絹雲でも、帯の収斂方向如何で、その性質が正反対になるということである。

従って、私は今この「文徳実録」の一節を見るに及んで、漸く、豊旗雲とは先生の言われる「雷しらす」や「晴しらす」のように、曲りくねった形の絹雲ではなく、直線状に北東から南西に亘って横たわる帯状絹雲だという確証を得ることができたわけである。

* Characteristics of Toyohatagumo?

** K. ITO, 静岡地方気象台

—1968年1月18日—